

令和3年度

実践集録

令和4年3月

宮城県特別支援教育研究会
視覚障害教育専門部

～～ 目 次 ～～

【巻頭言】

視覚障害教育専門部長 宮城県立視覚支援学校長 石墨 安洋 …………… 1

【実践事例】

弱視特別支援学級の実践 …………… 3

○小学校 11校

○中学校 4校

【令和3年度 視覚教育専門部 活動記録】

令和3年度事業報告……………20

第1回研修会資料 ……………21

第2回研修会資料 ……………24

「令和3年度 実践集録 発刊に寄せて」

宮城県特別支援教育研究会

視覚障害教育専門部 部長 石墨 安洋

(宮城県立視覚支援学校 校長)

令和2年から続く未だ全容がつかめない新型コロナウイルス感染症への対応を各学校が求められる中、弱視学級を担当する先生方から貴重な研究報告をしていただき、宮城県特別支援研究会視覚障害教育専門部を担当するものとして心より感謝いたします。視覚に障害を有する児童生徒への教育活動においては、教材に対する触察と近接による指導がどうしても必要となってきます。感染症への対応としてはリスクを伴う教育実践となるわけですが、各担当の先生方は安全に十分に配慮した上で、様々な工夫の上に実践している姿が見て取れる研究報告となっております。今年度の報告を見てみますと、文部科学省のG I G Aスクール構想に基づきながら、各校で整備が進むタブレットを用いた指導が多くありました。令和3年1月の中教審答申で示された令和の日本型学校教育にある「個別最適な学び」の実現に向けてもICT機器類の有効な活用が求められています。今回の報告の中ではタブレットを用いて教材を拡大表示したり、電子教科書としてのUDブラウザの活用を模索したりしている事例が多く見られましたが、一人一台の常時使用の状況が実現された際には、電子ポートフォリオとして学習履歴を残す機材としての活用も目指してみたいと思います。利用しているタブレットに残るこれまでの学習履歴から自分の学習状況を把握し、主体的に学びに向かう姿勢を育むことにつながっていくことが期待されています。一方、個別最適な学びを進める際には、それが孤立した学びとならないような手立ても必要となってきます。協力学級における学習機会を積極的に設定したり、整備が進むネットワーク環境を利用したオンライン交流授業を企画したりするなど、同年代の児童生徒との意見交流を行う機会を多く設けていくことで、中教審答申でもう一つ示されている協働的な学びの実現に向けても実践を深めていくことが求められています。また、今回の報告の中ではICT機器類だけではなく、板書の際の色や大きさの工夫、パーキンスプレーヤーを用いた指導、短距離走における同走手段や球技における用具の工夫等、児童生徒の見え方に合わせて各先生方の様々な工夫を知ることができました。その他にも視覚支援学校の相談支援センターとの相談事例も報告されており、こちらも児童生徒の就学先決定に向けて是非参考にさせていただきたいと思います。

令和2年度から小学校が、令和3年度からは中学校が新学習指導要領に基づく新しい実践を積み上げていくこととなりました。この実践集録が各先生方の次なる取り組みへの参考資料となることを願い、巻頭の御挨拶とさせていただきます。

实践事例

令和3年度 自立活動研修会 レポート
「自立活動の学習の展開」(視覚障害)

1 児童の実態

- ① **障害の状態** 両未熟児網膜症 発達性緑内障 右眼内レンズ挿入眼 左無水晶体眼
遠近両用の眼鏡を掛けて0.3の矯正視力である。
- ② **発達や経験の程度** 知的障害は見られない。学年が上がるに従って、視力低下する心配がある。
- ③ **興味・関心** 宇宙や恐竜に興味を持ち、それらに関する本を好んで読んでいる。
- ④ **学習や生活の中で見られる長所やよさ (○), 課題等 (△)**
○学習意欲があり理解が早い。特に計算が速く正確にできる。
○苦手なことでも粘り強く取り組む。
○係や当番の仕事に責任を持ち行っている。
△交流学級で前列に座席を配慮してもらっているが、文字の大きさによっては見えにくい。
△字形が整わず何度も書き直すが、消しゴムで上手に消せない。
△塗り絵をすることはみ出て形が判明できなくなったり、はさみを使って思い通りに切ることができなかつたりする。
△慣れない場所でのつまずきや、慣れた場所でも足元に注意を払わず、時々つまずきや転倒がある。
△友達の気持ちや様子を考えずに、強く言い過ぎることがある。
△生まれてからしばらくの間、チューブから栄養を摂っていたため(母親より)食に対して興味がなく、偏食が激しい。給食の様子を見ると食べるものが決まっている。家庭では、本人が食べるメニューは、ほとんど同じだそう。

2 指導課題の整理(自立活動の指導内容より)

(1) 身体の動き

眼鏡を掛けて0.3の矯正視力なので手元がはっきり見えないことや、手先の巧緻性が欠けるため正しい文字の書き方や道具の使い方などが上手にできない。そこで日常生活に関わりのある手先を動かす道具の使い方を身に付けさせたい。

(2) 環境の把握

黒板の文字が見えにくい場合の視覚補助器具の使用方を理解し活用させたい。

(3) 健康の保持

給食の様子から著しい偏食が見られる。未熟児で生まれ何度かの入院で味わって食べる経験が少なかったようだが、健全な成長にはバランスの良い食事の必要性を伝え、それぞれの食物が持つ栄養素を理解させ、食べる重要性や少しでも楽しみを感じさせていきたい。

3 指導目標と具体的な指導内容

- ・日常生活に関わりのある、手先を動かす道具の使い方を身に付ける。
- ・視覚補助器具の使用方を理解し活用する。
- ・バランスを考えて食べようとする気持ちを持つ。

選定された項目

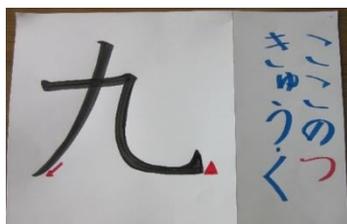
健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ・偏食が著しく決まったものしか食べない。 ・屋外での体育には紫外線予防のゴーグルを着用する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちを考えずに強く言うことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れない場所ですまづく。 ・前列の席でないと思えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手先が不器用 ・縄跳びや手足のバランスよく動かすことが苦手。 ・字形を整えて書くことや塗り絵が上手にできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達にいたずらをしてコミュニケーションを取る。

具体的な指導内容

<p>筆順に気を付け、字形を整えて書字の練習をする。板書を単眼鏡やタブレットを使用して読んだり視写したりする。 (国語の学習)</p>	<p>はさみを使って色紙を切ったり折り紙を折ったり、塗り絵に取り組んだりする。 (自立活動)</p>	<p>栄養のバランスを理解する。給食の栄養バランスを考えて食べる。 (自立活動・給食時間)</p>
---	--	---

4 指導の経過

- 漢字学習・・・①漢字スキルで新出漢字を読む。②筆順を確認したら水書で書く。③家庭学習で漢字練習をする。④漢字カードで漢字の書き取り、読み方を確認する。⑤水書で筆順とはらい・とめ・はねに気を付けて書く。



- 板書が見えない時には単眼鏡やタブレットを活用して視写を行った。左手で単眼鏡をのぞきな右手で視写するのは児童にとって難しかった。タブレット



で写真を撮り、手元で板書を拡大して視写することで落ち着いて視写できた。

- 興味のあるキャラクターの塗り絵やはさみを使って色紙を切る飾りを作成して、仕上げたらラミネートをして持ち帰ることにした。

5 まとめ

○指導の結果と考察

- ・漢字の学習の手順は上記のように進めてきた。特に漢字学習に水書を取り入れたことにより、間違えても消しゴムを使うことなく何度も書き直せた。(消しゴムを上手に使えずに消さなくても良い箇所まで消してしまうことが多かった。)筆で書くと「はらい・とめ・はね」が明確になり、正しく書こうとする意識が生まれた。また、マスの大きさを気にすることなく、大きく書くことができた。これらのことから水書は効果的だった。

○今後の課題

- ・健康な体をつくるために、どんな食物を食べたら良いのか掲示したり、毎日給食前にメニューを確認したりして、食に対して意識化を図ってきたが、給食に対しては進んで食べようとしない。今後、進んで食べた時にはシールを貼るなどの頑張りが目に見えるものを取り入れていきたい。
- ・色塗りに関しては、興味のあるキャラクターの塗り絵は意欲的に取り組むが、塗り方を考えて丁寧に塗ることができないので、今後も上手な塗り方を指導しながら継続して取り組みたい。

担任の補助を受けながら意欲的・主体的に体育に取り組むための工夫

【キーワード：スモールステップ】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童は、視力「右 0.3, 左 0.03」で、拡大教科書を用いている。ほとんどの教科は協力学級で担任が付き添いながら取り組んでいるが、新出漢字や算数は弱視学級で学習している。ノートや教科書を目の前まで近づけないと見えないため、普段は書見台を用いている。物の位置を把握することが苦手で消しゴムなど、置いた場所が分からなくて探したり、落として拾うのに時間がかかったりすることが多い。また、見えにくいことから、移動に恐怖を感じることもあり、廊下や校庭の移動に時間がかかり、体育の学習では担任と一緒に走るなどが必要である。また、登下校も毎日車で送迎されており、体力や筋力も他の児童と比べて少ない。「難しい」「できない」と発言することが多いが、スモールステップで取り組ませ、成功体験を増やしていくことで、様々な活動に進んで取り組めるようにしていきたい。

II 授業実践

- (1) 体育の鉄棒運動の単元で、前回りを目指してスモールステップで練習に取り組む。
 - ① 腕の力を付けるため、大きな鉄棒にぶら下がる（時間を少しずつ増やしていく）
 - ② 低い鉄棒を使い、ジャンプをして鉄棒にお腹を近づけていく。
 - ③ 両腕を使い、鉄棒に乗れるようになったら頭を少しずつ下げていく。
 - ④ 担任の補助付きで前回りをする。
 - ⑤ 自分一人で前回りをする。
- (2) 体育のボール運動の単元でボールの位置を確認しながら投げる・蹴る運動に取り組む。
 - ① 担任と2人1組になり、目の前でボールを受け渡す。（少しずつ距離を伸ばしていく）
 - ② カラーコーンを置き、そこを目がけてボールを投げる・蹴る練習をする。
 - ③ 友達と2人1組になり、投げる・蹴るの活動をする。（ボールが見えにくい場合には、担任がボールの近くに立つことで位置を把握できるようにする。）

III 成果

- ・スモールステップで取り組み、前回りができるようになった。一度補助付きで回れるようになると一人でもできるようになった。
- ・自分の成長を実感でき、休み時間も積極的に校庭に出て体を動かすようになった。
- ・マラソンや縄跳びなど、他の運動に対しても意欲的に取り組む姿勢が見られた。
- ・筋力がつき、机椅子を運ぶなど、学校生活を送る上で一人でできることが増えた。

IV 課題と改善策

休み時間に校庭へ出て練習をしたいという気持ちが強くなった一方で、自分一人で活動するのはまだ不安な気持ちもある。そのため、担任と一緒に校庭へ出られない場合には練習には取り組まず、校庭を散歩したり、教室で過ごしたりすることが多かった。安全面には配慮しつつも、縄跳びなど自分一人でできることは積極的に取り組ませていきたい。

自分の考えを分かりやすく表現し、学びを深める児童の育成」

～対話を促す働きかけと教材・教具の活用の工夫を通して～

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童は、両角膜白濁、両小眼球である。視力は右光覚で光を感じる程度、左0.06で左目の視力優位である。普段は拡大教科書と拡大読書器を用いて学習している。授業の中で学習用具をどこに置いたか分からなくなったり落として見つけるのに時間がかかったりすることが多い。自分では分かっているものの大人の手を借りることが多いため、授業に対しても受け身がちなところがある。

II 授業実践

算数科「わり算を考えよう」の単元の、余りの処理の仕方について考える授業では、児童の考えに対して発問したり教師が誤答を提示したりすることで対話を促すことができるのではないかと考えた。また、教材・教具についても児童の実態に合わせたものを活用することで児童の学びを育成できると考えた。

(1) 誤答の提示や児童の考えへの発問

・児童と等身大の設定の子ども役になり、気になった所や分からないところを質問したり誤答を提示したりすることで児童の主体的な対話を促すことができるよう働きかけた。

(2) 児童の見やすい大きさや太さ、色などを踏まえた板書や教具の活用

- ・事前に児童と相談、確認し授業（板書）の中で取り入れるようにする。
- ・チョークの色を赤、白、黄の三色を使用した。文字の大きさや太さにおいても児童と相談した大きさを板書した。
- ・教具においては、児童の持ちやすい大きさと色に配慮し、丸く切った白い画用紙を用いた。

III 成果

- ・児童と等身大の子ども役になって、誤答を提示したことが思考の一助となった。
- ・対話においても、教師の誤答に対して自分の考えを述べる姿が多く見られ、学習に対する主体性が感じられた。
- ・児童の実態に合わせた教具（具体物）を用いたことで、余りの処理の仕方に悩んでいた児童にとって解決の糸口となった。
- ・チョークの色（赤、白、黄）や文字の大きさ・太さなどで視覚的な支援を行ったことで、児童にとって学習しやすい環境を整えることができた。

IV 課題と改善策

- ・児童の右側で支援していたことが、児童から見えにくく書きづらい状況をつくってしまっていたので、支援する際の位置については再度検討しなければならない。
- ・黒板全体を使って板書したため、児童が全体を把握することが難しく、席を移動することがあった。児童の見える視野をしっかりと把握し、板書を考えていく必要がある。
- ・事前にノートを作成していたので、考えたり説明したりする時間は十分にとれたが、書く分量が少なくなってしまうので、ある程度の文章量は確保しなければならない。

学び合い、自分の考えを表出する子供の育成

ー 国語科・生活単元における「昔話」の指導を通して ー

I はじめに

特別支援学級では個別指導でのひらがな獲得練習や単語ドリルが多くなり、文字習得の前後に国語に対する授業の意欲が落ちてくる。そこで興味をもち意欲が続くような、分かりやすい昔話の教材化を考えた。弱視学級3年生、肢体不自由学級2年生とで合同で学び合う国語の授業ができないか検討した。

II 弱視学級における昔話の意義・よさ

弱視学級で行う昔話の意義・よさは、

- ①取り組みやすく、聞いて内容が分かりやすい。
- ②物語から派生した語句・比喩・慣用句（どろ舟だ：かちかち山）などを指導できる。
- ③教訓や道徳的なもの（更に残酷なこと）についても具体的に話し合える。
- ④歌をはじめ動作化や劇などに発展できる。
- ⑤教師や保護者も大筋を知っている。（家庭学習や宿題等への発展も期待できる）
- ⑥日本人としての伝統・文化・背景（バックボーン）があり、比喩として日常的に使われている。

III 昔話教材で合同授業を行うく指導のポイント>

①かちかち山	・・あらすじ・動作化・歌
②桃太郎	・・あらすじ・登場人物・歌
③舌切り雀	・・あらすじ・得する方は？
④猿蟹合戦	・・あらすじ・攻撃の仕方
⑤花咲爺さん	・・あらすじ・得する方は？
⑥鶴の恩返し	・・あらすじ・恩返しとは
⑦こぶ取り爺さん	・・あらすじ・得する方は？
⑧一寸法師	・・あらすじ・立身出世
⑨三枚の札	・・あらすじ・災難を逃れる
⑩金太郎	・・あらすじ・力持ち・歌
⑪わらしべ長者	・・あらすじ・長者とは
⑫浦島太郎	・・あらすじ・現在過去未来
⑬かぐや姫	・・あらすじ・月・星・宇宙
⑭あわび姫伝説	・・地域の言い伝え・伝説
⑮劇を通して	・・あらすじ・登場人物

日本5大昔話をはじめ有名な昔話の中から理解しやすいものを15話選んだ。更に地域に伝わるお話、学習発表会で行った劇の題材も入れることで、

話と劇と現実が結びついていることを感じたようだ。

IV 子供への聞かせる題材について

昔話は古いものでは室町末期頃の成立といわれ、庶民の文字使用がない時代から口承伝承により全国に伝播し、様々な異説に枝分かれしている。時代の変遷により、特に近年は「殺生の忌避や皆仲良く」という風潮にしたがって書かれたものも多くなっている。

①youtubeの簡易的で分かりやすいお話や動画から、②自校の図書館の本、③更には地域の図書館での本までである。昔話は子供の実態や指導者の好みにより上に記したように様々なレベルの話を選択できるようになった。

V 昔話授業のポイント

登場人物やあらすじ（要約）がつかめるようになることが目標であるが、「キーワード」を引き出しながら時系列にそって登場人物のしたことを確認していく。

VI 授業実践からく指導のポイント>

主な登場人物やあらすじを確認し、話のポイントとなるところを動作化や劇にした。「かちかち山」では「カチカチする音なんの音？」等のやりとりや猿蟹合戦では登場者が猿をたいじする場面など昨年度は話の一部分を行った。今年度はお話全般を役割交代して演じさせた。「舌切り雀」では優しい爺さん役やいじわる婆さん役などを言葉遣いを含めて指導した。役交代にとまどう様子もみられたが話の理解につながる一助になったと思う。学び合いができる最低人数であったが、3年生が2年生に教える場面が多かった。

VII 今後の予定

指導が空くと記憶が薄れてしまうので軽重をつけ集中して行うようにした。好きな話の一つ選んで深く指導することも考えている。今年度で15話全て終了させる予定である。

弱視児童の見えにくさに配慮した教材やICTの工夫

I 見えにくさによる学習上及び生活上の困難さの実態

児童は、両視力障害で、拡大教科書を使用している。空間における物の位置の把握と自分との距離と位置関係の把握が難しかったり、対人距離が掴みにくかったりする。また、見えにくさと生活経験の乏しさ、同年代との関わりの少なさから同世代が知っている一般常識を知らないことがある。さらに周りの児童が完璧に出来ていて、自分は皆より劣っていると思い込んで塞ぎ込み、休みが続いたり不眠など身体症状が現れたりすることがある。

見えにくさによる児童の負担を減らし、様々な学習や活動に主体的に取り組ませることで自信を持って学校生活を送らせていきたいと考えている。

II 授業実践

算数の「角の大きさの表し方を調べよう」の単元では、分度器使って角度を測る方法や、描き方を学ぶ学習を行った。角の大きさを調べる際に、書画カメラ台にタブレットを乗せ、タブレットのカメラ機能を使って手元を拡大して角度を測ることにした。顔を拡大機よりも画面に近づけて学習に取り組む事ができ作図の煩わしさを軽減することに繋がると考えた。

<分度器を使って〇度の角を書く場合>

(1) 教師用デジタル教科書の問題を印刷・拡大して使用する

拡大教科書を印刷して、平面の状態で角度を測るようにさせる。拡大教科書を印刷しても不鮮明な場合はデジタル教科書から図をダウンロードして印刷して使用させる。

(2) タブレットを使って手元を拡大させ、分度器を使って〇度に印を打ち、線を引く

タブレットで見やすい大きさに拡大させながら分度器で正しく角度を測って鉛筆で印を打ち、作図に取り組ませる。

III 成果

- ・拡大教科書に直接書き込むよりも、拡大教科書を拡大したプリントの方が作図しやすく、スムーズに学習を行うことができた。
- ・拡大機よりもタブレットの方が見やすい大きさに微調整しながら容易に操作・調整ができた。また、ぴったりと画面に顔を近づけて、手元をのぞき込みながら作業できることも良かった。
- ・手元を自在に拡大できることから、図工の絵の具の塗り残しを確認したい時や、細かく彫刻刀で彫る時など他教科の学習にも生かすことができた。

IV 課題と改善策

タブレットの活用により弱視児童の負担を減らし、学習環境を向上することができたと考えられる。また、タブレット操作の経験を生かし、画像を貼り付けてスライドを作る際などやり方をすぐに覚えていた。一方、タブレットを見ながら分度器を操作し、目盛りを読み、作図することは時間がかかり、上手くできないことも多い。また、拡大する部位がずれていることがあり、教師が書画カメラをずらすなどサポートは必要であった。上手く作図できないことで自信が持てなかったり学習へのモチベーションが下がったりしないように、紙面での学習とタブレット等ICTの学習を併用して活用していく必要があると考えられる。

国語科の漢字学習における指導の工夫

【キーワード：ICT の活用】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童は、右光覚弁、左(0.02)で矯正眼鏡を使用している。眼振があり、焦点が定まりにくい。眼鏡を使用しても10cmくらいまで近づかないと見えない。また、多動でもあり、奇声を上げたり、体をゆすったり、机を叩いたりすることが多い。

II 授業実践

(1) タブレットPCの活用

国語や算数、社会など様々な学習活動でタブレットPCを用いて指導を行ってきた。国語や算数では、漢字の筆順アプリ、九九アプリ、計算アプリを用いて、漢字の読みや字形の暗記、計算力を向上できるように学習を行った。社会では、日本地図を覚えるために動画を用いたり、ごみ処理場の様子などの動画を利用したりして学習の理解度を高めるようにした。

(2) 漢字カードの作成

低、中学年で習う漢字のカードを作成し、新出漢字を10個選んで読み方を確認した後、その漢字を10個並べ替えて物語を作る活動を行ったり、カルタゲームを繰り返し行ったりすることで漢字の定着を図った。カルタゲームは、自分で読めたら児童の得点、ヒントをもらうか分からなければ教師の得点というルールで行った。



III 成果

- ・漢字の学習に対して意欲的に取り組むようになった。漢字の筆順アプリは、正しく書けると一番左に正しい漢字が表示されるシステムになっており、きれいで丁寧な字で漢字を書こうとする意識が向上した。
- ・ゲームの要素を取り入れたり、物語形式で漢字を学習したりすることで、学習意欲も向上し、定着も早かったため、とても有効な手段だった。
- ・カードを用いたカルタ形式の漢字の復習も、本人の「全部取る」という意識が強いため、非常に有効な復習方法だった。

IV 課題と改善策

視覚障害だけでなく、知的障害、多動の障害もあるため、集中を持続して学習に取り組むことが難しい。午後からは落ち着かない行動や言動が見られる。そのため、昨年から継続していた基本的に落ち着いている2,3校時に国語、算数の学習を行うようにしてきた。今後も集中できる時間帯に学習を行うようにしていきたい。自分の興味のある学習に対しては非常に意欲的に取り組むため、新単元に入る際などには児童の興味を引くような学習の導入になるように心掛けていきたい。

自分の目の見え方についての自己理解と周知への取組

【キーワード：障害理解】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童の視力は、左眼0.01、右眼0.08で、左眼は中心暗転がある。羞明があり、教室は1日中カーテンを閉め切っている。

ほとんどの教科は弱視学級で学習し、学習内容は十分に理解している。拡大教科書(26P)を使用していたが、見えづらくなってきたため、今ではUDデジタル教科書を使用している。板書の文字や図、ノートを取るときはマス目が見えず、拡大読書器を活用している。

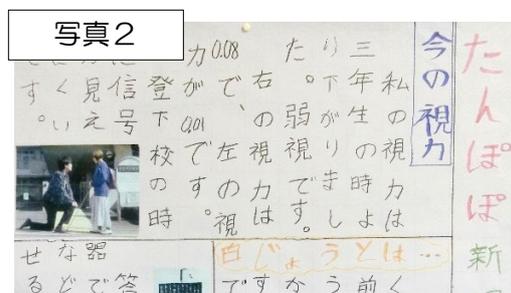
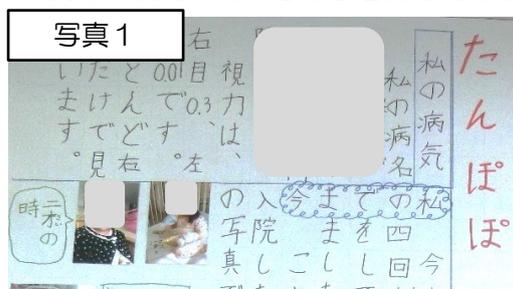
II 授業実践

『「たんぼぼ新聞」を作ろう』

壁新聞を作成してみんなの前で発表することで、自分のことを理解してもらうことをねらいとして設定した。みんなに知ってもらいたいこと、配慮してほしいことなど自分の気持ちを表現することで、自分の障害に向き合い、自分自身への理解を深めることにつなげたいと考えた。

昨年度、交流学級のみみんなに自分のことを知ってほしいという思いから、学級新聞を作成し、みんなの前で発表した。(写真1)今年度は、第2号として弱視を取り上げたドラマで興味をもたせ、新たに増えた補助具を紹介するなど、いろいろと工夫させながら、学習を組み立てていった。(写真2)

- (1) 自分の目の見え方を伝える方法を考えたり、自分の気持ちや願いを整理したりする。
- (2) 授業で使っている拡大読書器や、登下校で使用している白杖など、写真を使って分かりやすく説明できるように工夫する。
- (3) 発表の際は、みんなが興味・関心をもってくれるように、ドラマの話題を取り入れたり、実際に使用している様子を見せたりする。



III 成果

- 記事にまとめることで、今の自分の気持ちに向き合って、整理することができた。また、どのようにしたら分かりやすく伝えられるかを真剣に考えることができた。
- 壁新聞を作成し、教室の廊下に掲示したところ、他学年の児童にも感想を書いてもらい、多くの人に周知することができた。反応がとてもうれしかったようだ。昨年度と同様、楽しみながら意欲的に学習に取り組む姿が多く見られたので、児童にとって大変有効であった。

IV 課題と改善策

今回新聞に載せられなかった記事や新たに伝えたいことは、来年度につなげていきたい。しかし、模造紙に書くことが大変になってきているため、タブレットPCを活用し、パワーポイントなどで発表する方法を進めていくなど、児童の意欲を持続させながら工夫していきたい。

児童が自立活動に主体的に取り組むための支援の工夫

【キーワード：教材教具の工夫と活用，ことば遊び】

I 見えにくさによる，学習上・生活上の困難さの実態

児童は，弱視学級在籍の5年男子児童である。乳児期から全盲を有しているため，視覚経験の記憶がなく，日常生活全般において介助が必要である。また，学習面や情緒面においても困難さを抱えている。情緒面においては，こだわりが強く，問題の外在化や常同行動（手を動かしながらくるくる回る。）により，気持ちをコントロールする場面が多く見られる。

学習面においては，音声教材を用いた学習を好み，児童文学の録音教材や多様な音楽など，興味・関心のあることへの集中力や記憶力は優れている。反面，手指の運動や触察に重点を置いた学習に対しては苦手意識が強いため，主体的に取り組むよう支援をしていきたいと考える。

II 授業実践

自立活動「手指の運動をしよう」の単元において，手作りの「見本合わせ版」やペグ（ネジ釘），粘着性のビーズを貼り付けた点字表，振り返りのための「ふわふわボックス」，既製品の卓上ベルなどの教材教具を活用した。また，ことば遊びを取り入れたならば，児童が主体的に活動し，点字にも興味・関心をもつようになるのではないかと考えた。

(1) ことば遊びをしながら「6点ペグ」にチャレンジする。

- ・両手を用いて穴を触察してから，点字6点の位置を確認する。
- ・語頭が母音「アイウエオ」で始まる単語を発音し，ペグを小さな穴に差し込む。（「アヒルのア」「インコのイ」など）
- ・ベルを鳴らしてから，お気に入りの単語を発音するよう促す。
- ・教師の見本を確認しながら，母音の正しい位置にペグを入れられるように，ゆっくりサポートする。
- ・集中が難しい時は，頑張ったら御褒美があることを伝え励ます。
- ・スペシャル問題に取り組む。6点で表すマ行音の「メ」にチャレンジすることで，タイプライターの操作への意欲を高める。



(2) 点字用タイプライターを操作する。

- ・6個のキーとそれぞれの点の位置をマッチングさせる。
- ・母音「アイウエオ」を一音ずつ連続して打つ練習をする。
- ・子音「メ」を連続して打つ練習をする。
- ・自分で打った点字を左側から両手でゆっくりなぞる。



(3) 振り返りをする。

- ・3個の「ふわふわボックス」に触れて学習を振り返る。
- ・パータッチやグータッチをして頑張ったことを称賛する。



III 成果

- ・学習の活動の中に，クイズ形式でことば遊びを取り入れたことにより，児童は思いのままに言葉を発することができた。また，継続することで語彙も増え言葉の意味にも関心を示した。何よりもコミュニケーション力が向上し，言葉のキャッチボールができるようになった。
- ・点字やタイプライターに触れることに苦手意識をもっていたが，「メ」の音で始まる言葉を発しながら，児童が主体的にレバーの操作や点字の触察に取り組んだ。
- ・自己評価に加え，教師が称賛することで自己肯定感や達成感を味わわせることができた。

IV 課題と改善策

- ・本児の発達段階を考えると，50音の点字を全て理解するには時間を要すると思われる。今できることを認め，困り感に寄り添いながら根気強く支援をしていくことが不可欠である。
- ・特定の事柄に執着し，他者との会話が一方的になりがちである。日常生活の指導を充実させることにより，時と場に応じた話し方や自己表現力を身に付けていきたいと考える。

家庭科の裁縫学習における支援の工夫

【キーワード：裁縫】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

本児童は、右目の視力は0.2であるが、左眼は手動弁でほとんど見えていない。拡大教科書26ptを使用して普段の学習に取り組んでいる。国語・算数・自立活動以外の学習活動は交流で行っているが、単元の内容によっては個別に学習を行うこともある。交流学习の際は、拡大読書器を使用している。視野が狭く、周囲の様子を捉えることが難しいため、教師側から状況を伝えている。

包丁を使った調理や電動糸鋸を使つての工作などの作業を伴う学習活動については、教師の補助が必要である。本児童は、手や指先を使った作業に時間を要する。作業経験が少ないことが原因だと思われるが、自分是不器用だと思込んでいる。家庭科の針と糸を使った裁縫の学習では、児童の意欲を高められるように、スモールステップで学習を進めた。

II 授業実践

題材名「はじめてのソーイング」

家庭科のマスク作り・小物作りの指導に当たっては、次のような手立てをとった。

- iPadのカメラ機能を用いて、並縫いをした実物細部を拡大して見せることで、並縫いの仕組みを視覚的情報として捉えさせた。
- 玉結び、並縫い、返し縫い、玉止めの手順は、有孔ボードに実際に紐を通して確認させた。通すたびに紐を張り、緩まないように意識して取り組ませた。
- 製作手順をホワイトボードに板書し、確認させながら活動を進めた。
- マスク作りと小物作りでは、縫う箇所にインクペンタイプのチャコペンで印を付け、真っ直ぐに並縫いができるようにした。
- 児童が縫った箇所を確認しやすいよう、黒糸を使用した。

III 成果

授業実践を通して以下の成果があった。

- iPadや具体物を活用して制作手順を理解させてから取り組ませたことで、実際に裁縫の活動ではスムーズに作業を進めることができた。
- 何度か取り組んでいるうちに自分で作業手順を考えて、取り組むことができるようになった。
- 授業参観の際に小物作りの様子を見ていただいたところ、母親から「こんなにできるとは思わなかった。」と褒めてもらい、児童は達成感を感じている様子だった。

IV 課題と改善策

裁縫の活動中は集中して細かい作業に取り組むため、疲れている様子が見られた。活動の合間に休憩を入れる必要がある。また、今後は児童の興味や関心があるものと関連させ、意欲を高められるような教材・教具を工夫していきたい。

iPad を活用した指導の工夫と実際について

【キーワード：iPad PDF 版拡大教科書 UD ブラウザ】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童は、両目共に視力は0.15程度である。国語と算数に関しては、個別で学習に取り組んでいるが、それ以外のほとんどの教科は、交流学級での一斉授業で学習している。交流学級での教科の学習は、座席から黒板の板書やテレビの内容を読み取ることが困難であるため、据え置き型の拡大読書器を使用している。また、一斉指示を聞き逃すことも多くあるため、個別の声掛けなど合理的な配慮を行いながら学習指導をしている。教科書は、拡大教科書と個別で持ち込んでいるiPad内のUDブラウザを使用している。iPadは、個人で所有しているものを山市の許可を得て、使用している。

II 授業実践

(1) 授業の中でUDブラウザを活用した実践

授業では基本的に拡大教科書を使用しているが、算数科の学習で、グラフの目盛りが読み取りづらく、マスの判断がしにくいことが分かったため、iPad内のアプリケーションであるUDブラウザを使用して学習を行った。自分が見えやすい大きさまでマスを拡大し、ペンの機能を使用して実際にグラフに書いた。また、家庭学習の際に拡大教科書を、持ち運ぶことは重くて不便なため、家庭学習の際にはUDブラウザを使用した。

(2) 授業の中で拡大鏡を使用した実践

理科室での実験や特別教室を使用する際には、据え置き型の拡大読書器が使用できないため、iPad内の拡大鏡を使用して、黒板を写して授業を受けた。明るさと拡大率は、指をスライドさせて変更できるため、ノートに板書を写しながら、自分で見えやすい環境を簡単に整えることができた。

(3) リコーダーの指導

リコーダーの頭部管をくわえながら、指を見て穴の位置を確認することが難しかった。そのため、音楽科担当と相談をして、押さえる穴の位置に色を塗った画像を作成し、本人のiPadに送信して、拡大して見ながら練習できるようにした。

III 成果

(1) 授業の中でUDブラウザを活用した実践

拡大読書器とUDブラウザを併用することで、紙の拡大教科書では読み取りにくいと感じていた算数のグラフや表、社会や理科の写真という資料をUDブラウザの活用により、スムーズに使用できるようになった。また、教科書内の大切だと思ったページや昨日はここまで学習したというページを「お気に入り」として登録することで、交流学級での一斉指導での場面で、紙をめくる時間が短縮し、授業についていけることが増えた。さらに、宿題の自主学習を行う内容を、学校で教員と決め、お気に入りに登録し、UDブラウザで家庭学習に取り組むことで、重い教科書を持ち運ぶ必要もなく、家庭で保護者と今の進捗を確認できる良さもあった。

(2) 授業の中で拡大鏡を使用した実践

授業においてiPadを活用することで、学習意欲の向上が見られた。また、日々学校で練習を重ねることが本人の自信になり、外に出て電車に乗る際に時刻表を確認するなど、自主的に使える機会が増えた。

(3) リコーダーの指導

リコーダーを演奏することに苦手さを感じているが、本人が得意と感じているICT端末を使用することで、学習意欲の向上が見られた。また、写真を共有することで、自分が見えやすい大きさまで拡大し、押さえる指を確認できた。さらに音ありの動画も共有することで正しい音を確認しながら練習ができた。

IV 課題と改善策

iPad内に教科書や拡大鏡など支援ツールが複数入っていることで、1つの機器で学習環境が整えられることが分かった。しかしながら、持込のiPadは家庭で娯楽用として使っていることもあり、本人にとって遊び道具という認識が強く、授業中もスクロールで遊ぶことがあり声を掛けている。1つのツールでいくつものことができる便利さもあるが、その複数の機能が本人にとっての刺激となるためiPadの使用方法については、更なる指導が必要と感じた。

中学校進学に向けた就学指導について

【キーワード：就学 中学校進学】

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

児童は、両近視性乱視、眼振があり、遠見 0.4、近見 0.3（両眼、矯正視力）である。小学6年生で弱視学級に在籍し、国語・算数のみ個別学習で取り組み、他の教科は拡大読書器や拡大教科書を使用しながら協力学級で学習している。

中学校進学を見据え、昨年度（5年生時）より就学先を地元の中学校か、視覚支援学校中学部か、悩んでいる様子があった。具体的には、「中学校の学習についていけるか心配。」「視覚支援学校は自宅からバスで1時間近くかかるため遠くて心配。」「（視覚支援学校は）友達と離れてしまうことが寂しい。」「（中学校は）どこまで支援していただけるか分からないことが不安。」ということが挙げられた。

II 実践

視覚支援学校相談支援センターの先生に電話相談の上、以下のように就学に向け準備、合意形成を進めた。

○視覚支援学校 中学部 見学

6月2週目に視覚支援学校中学部の授業の見学に伺った。事前に自立活動の時間に「気になることリスト」を作り、実際に中学部1年生、3年生の学習の様子や寄宿舎の様子を見学、その後質問タイムを設けていただいた。

○県内中学校 弱視学級 見学

視覚支援学校より、見学させていただきたい旨を県内の弱視学級のある中学校へつないでいただき、6月3週目に見学に伺った。弱視学級の個別学習の様子、交流学习の様子を見学し、教科担任制での学習の様子について質問することもできた。

○通学圏中学校（通常学級、病弱・身体虚弱学級）見学

6月4週目に地元の通学圏の中学校見学に伺った。事前に視覚支援学校中学部や県内中学校の弱視学級を見ることができていたため、「こういうサポートは可能か？」と具体的に質問することができた。

III 成果

今回は視覚支援学校の相談支援センターの先生のご支援の元で、本人、保護者とも実感を伴って納得し、合意した上での就学指導を進めることができた。各学校見学についても、事前に「気になること」をリストアップしたり、6月に3週連続的に、イメージを膨らませながら見学できたりしたことで、「こう思っていたけど、こうだった。」「分からない不安は少し減った。」と感ずることができた様子だった。

IV 課題と改善策

児童が自分の将来に向けた選択には、様々な不安や、見通せなさが伴うことから、関係機関との連絡をとりながら、本人・保護者の不安を少しずつ減らしていけるとよいと考えた。今後進学先と丁寧に引継ぎを行い、必要に応じて入学後も情報交換が行えたらと考える。今回の就学支援については校内のみでは成り立たず、視覚支援学校のご支援があってこそできた内容であり、相談センターのご支援に感謝申し上げたい。

陸上競技（50m走）でタイムを縮めるための指導の工夫

－ホイッスルの音を効果的に利用して－

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

本生徒は、両目弱視のため、拡大教科書及び拡大読書器を使用して学習している。まぶしいのが苦手で、視野も狭く中心部がぼやけて見えるので、体の姿勢を変えて、焦点を合わせるのに時間がかかることがある。教科書や資料集のページをめくって、指定のページを開くこと、開いたページから必要な文や写真、資料をさがすこと、配られたプリントから自分の分だけ取ることなどが、やや苦手である。このような困難さを抱えているが、通常学級で、他の生徒と同じ授業を受け、ほぼ同じ活動をしている。

II 授業実践

保健体育「陸上競技」で「50m走」を行った。スタート地点からゴールを見通すことができず、距離感がつかみづらく、何も無いところでは、まっすぐ走ることが難しい生徒なので、如何に50mをまっすぐ走らせ、タイムを縮めることができるかが課題であった。そこで、さまざまな工夫を試みた。

(1) ラインを引いてその上を走る。

まっすぐ走るとはできるが、ラインを見るためにずっと下を向いたままになってしまい。スピードが上がりにくい。

(2) 伴走者ときずなで結んで走る。

伴奏者が生徒とスピードを合わせるのが非常に難しく、実行するのが困難である。

(3) ゴール地点から声をかけ続ける。

実行してみたが、本人が声の方に向かってまっすぐ走り続けるのは、難しいことがわかった。

など、さまざまな方法を試みたが、あまり、上手くいかなかった。そこで、

(4) 伴走者がホイッスルを鳴らしながら並走し、導く。という方法を試みたところ、

本人が顔を上げてまっすぐ走ることができ、加速もし易い。

ということがわかり、現時点では、(4)の方法が最もよいことがわかった。

III 成果

- ・さまざまな方法を試みるなかで、より良い方法を見つけ出すことができた。
- ・伴走者がホイッスルを鳴らしながら、走る方法が、現時点では、最良の方法であることがわかった。その結果、顔を上げてまっすぐ走れるようになり、50m走の自己ベストを2秒縮めることができた。

IV 課題と改善策

今年度の体育の授業では、体育教員の二人体制で臨むことが出来たので、50m走での伴走が可能だった。しかし、かなり、体力、脚力のある教員でないと何度も練習につきあいながら、本番も走りきるのは難しい。誰が指導者になっても、実現可能な方法を見つけ出すのが、今後の課題である。

家庭における点字学習のための教材の提供

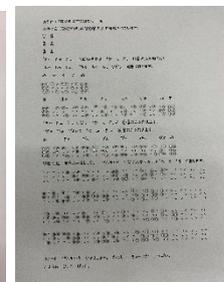
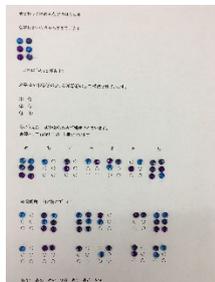
I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難の実態と支援の理由

本生徒は、小学6年時に発症したが、普通学級で友達の協力を得ながら学校生活を過ごしていた。中学校弱視学級入級後も協力学級で過ごすことを希望し、ほとんどすべての活動を協力学級で行っていた。授業では拡大読書器やiPadを活用していたが、見えにくさが増し、長時間目を使うことが苦痛な様子が見られた。学習、移動、部活動、友達との関わりなど、中学校での学校生活全般が苦痛となり、学校を欠席し家庭において今後について考えていた。視覚支援学校の見学をきっかけに点字に興味を持ち始めたことから、家庭で少しずつ点字の基本を学ぶことができるよう教材を提供することにした。

II 実践

点字を導入するにあたり、本来であれば点字の前に「触ること」に対する興味を引き出すなど系統的に指導を進めていくべきものとする。しかしながら、本人に直接指導することができないということと、興味を持った点字が取り組みやすいものであるという印象をもってほしいという思いから簡単な導入教材を作成し母親から渡してもらうことにした。

まず、点字図書館販売の点字キューブとデコレーション用ビーズシールで作成した教材を提供した。その後毎週1枚ずつ作成し、回数が進むにつれてビーズの大きさも小さくしていった。家庭にある拡大読書器で確認しながら読むことができるよう墨字も添えた。



① 点字キューブ
(点字図書館HPより)

②第1回ア行

③第3回サ行

④第6回ハ行

⑤第11回拗音

III 成果と課題

母親の話によると、生徒は②の教材でアイウエオを簡単に読むことができおり、その後①の点字キューブ（組みあわせて点字を作ることが可能）を使って「これがア、これがイ」と字を作っていたとのこと。③の大きさまでは机の上に置いておけば母親に法則を確認してもらいながら読んでいたとのこと。墨字以外の使用文字の選択肢の一つとして点字に興味を持たせることはできたといえる。しかしながら④、⑤の小ささに進むと、触ることがなくなってしまったとのこと。文字を小さくするタイミングが早すぎたことでせっかくの「触って読もうとする」意欲を減退させてしまったものとする。やはり本来生徒の様子を実際に見ながら指導していくべきものなのだと感じる。

恐怖心を取り除き、意欲を引き出す教具の工夫

－ 体育 バレーボール －

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

本校の生徒は黒板の文字を読み取る際、縦横20cmで1mくらいまで近づけば読み取ることができ、右目を近づけて見ている。普段は、タブレット教科書と拡大教科書（22ポイント）を併用し、拡大読書器を用いて学習している。

学習には意欲的だか、読み書きに時間を要する。基本的に協力学級で学習しているが、ノートを書くことに満足し、内容理解に乏しい。

生活では、顔の判別が難しく、協力学級の友達の名前を覚えるのが苦手である。また、コミュニケーションを図るのが苦手であったり、動作や指先のぎこちなさがある。

II 授業実践

今回のバレーボールの学習ではソフトバレーボールを使用した（写真左側）。ボールの重さは100gでビニール製のため、顔にぶつかっても痛くない。ボールへの恐怖心も少なく、生徒が安心して授業に取り組むことができる。また、通常学級で使用しているボール（写真右側）より面積が大きく、落下速度もゆっくりなため、レシーブタイミングをつかみやすい、タイミングが合わなくても手に当たりやすいと考えた。



慣れてきたら、キッズバレーボール（写真中央）での練習も視野に入れ取り組んだ。

ボールになれる動きとして、対人で簡単なパスキャッチからアンダーハンドパスなど実践的な動きに繋がった。教師とペアで、1回ずつゆっくり行った。

（体育は特別支援学級で行っている）

III 成果

・実際にボールを触り、軽さや柔らかさを理解した上で練習を行ったため、ボールを怖がことなく取り組むことができた。対人パスで、ボールの落下するタイミングを捉える事が難しかったが、練習を重ねるごとに手がボールに当たるようになった。

・2対2のゲームの際に、両手でボールを持ち、下投げで「○○さんいくよー」と事前にボールの落下先を伝えると、ボールを手に当てられる回数が増え、少しラリーが続くようになった。

・チームの友達にサーブを譲ったりと他者と話す場面もあり、自分の思いを言葉で伝えるといった言語活動の充実にも繋がった。

IV 課題と改善策

ボールへの恐怖心を抱くことなく練習に取り組めたのは良かった。ボールの落下地点を事前に伝えないと、ボールを捉えることが難しかった。タイミングを図ることは他の競技にも必要であるため、今後の体育でも意識して取り組ませたい。

見えにくさからくる難しさがある分、萎縮してしまう事も多いが、少しでも成功体験を積み、自信に繋がるような学習の支援を行っていかれたらと考える。

学習支援・活動支援の工夫

I 見えにくさによる、学習上・生活上の困難さの実態

本生徒の右の視力は0.1程度で視野狭窄であり、左の視力はない。学習面では、授業中、板書をノートに写す時にiPadのカメラ機能を活用している。しかし、画面越しの姿勢が悪く、首の痛みや腰痛を訴えることがあった。また、ほとんどの授業が個別指導のため、他の生徒と交流する機会が少なく、相手に分かりやすく伝えることや、考えを広げたり深めたりすることを苦手としている。生活面では、経験が少なく、物事への興味・関心が低いため、他者とのコミュニケーションが幼稚になりがちである。

II 授業実践

本生徒の実態から、次の4点について支援を工夫し、指導に当たった。

①PDF版拡大教科書の活用

今年度からiPadにPDF版拡大教科書を取り入れた。授業だけでなく家庭学習にも活用した。

②iPadスタンドの使用

授業中の姿勢改善のため、机に取り外し可能なiPadスタンドを設置した。

③振り返りの時間の設定

相手に分かりやすく伝えることや考えを広げたり深めたりするために、帰りの会で振り返りの時間を設定した。本生徒がその日どのようなことがあったのか、そのことに対してどのように考えたのかについて発表し、担任が質問して内容を掘り下げるようにした。

④付箋を活用した指導の工夫

③と同様のねらいで、数行程度の日記や学校行事の振り返りの作文を書く際に、ポイント（いつ・どこで・何を・どう思ったのか等）を提示した付箋を用紙に貼り、ヒントとして活用した。

III 成果

①PDF版拡大教科書の活用

学習方法の選択肢が増え、学習内容に応じて生徒自身で使い分けて授業に臨むことができた。また、iPadを家庭に持ち帰ることもできたため、家庭学習の習慣の定着にも繋がった。それに伴い学習意欲が上がり、「この言葉はどういう意味ですか。」、「〇〇は何ですか。」など、本生徒自ら学ぼうとする姿勢が見られた。

②iPadスタンドの使用

姿勢改善までは至らなかったが、体の痛みを訴えることはなくなった。

③振り返りの時間の設定 ④付箋を活用した指導の工夫

自分の考えを少しずつ表現できるようになってきた。語彙が少しずつ増えたことで、他の生徒とのコミュニケーションも豊かになってきた。

IV 課題と改善策

今年度はiPadのカメラ機能を補助具として使用することが多く、不適切な時にも使用する場面があった。必要に応じて、単眼鏡やルーペなどのiPad以外の補助具の活用も継続して指導する必要があると感じた。また今後は、本生徒が自立した生活を送るために、様々なスキルを身に付けていかなければならないと考える。特に、本生徒の場合は、依然として他者とのコミュニケーションが幼稚な面が見られたため、周りの人に意思表示をするためのスキルが必要だと感じる。

令和3年度
視覚障害教育専門部
活動記録

視覚障害教育専門部 事業報告書

専門部部長 石墨安洋（視覚支援学校校長）
 事務局 宮城県立視覚支援学校
 幹事 横山繁徳（視覚支援学校）
 樋浦伸司（七ヶ浜町立亦楽小学校）

	期 日	名 称	内 容	場 所	講師等の氏名等
研 究 大 会 等	6月上旬	総会	総会 ・令和2年度事業報告 ・令和3年度計画	紙面開催	
	7月27日(火)	研修会①	オンライン研修 13:30～15:30 弱視学級を対象とした情報交換	各校 オンライン	
	7月30日(金)	宮城県特別支援教育研究会 夏季研修会	講座 「見えないってどういうこと？～手と耳と言葉を使って～」	宮城教育大学附属特別支援学校	<講師> 視覚支援学校 教諭 阿部真由美
	10月14日(木)	研修会②	オンライン研修 15:30～17:00 本校支援センター長を迎えての 指導上の課題への質問と各校の 情報交換	各校 オンライン	<講師> 視覚支援学校 教諭 中澤由美子
	令和4年 2月	代表者会 研修会③ (中止)	代表者会 ・令和3年度反省 ・令和4年度計画 弱視特別支援学級授業実践発表会 (実践収録にて対応)	紙面開催	

	名 称	規 格		売・非 売 の別	発行部数 発行回数	頒 布 先
		版	ページ数			
成 果 刊 行 等	実践集録	PDF	30P	非売	年1回	視覚障害教育専門部会員

- ※新型コロナウイルス感染症対応から、今年度の活動はオンラインを中心に実施した。
 ※弱視教育に初めて携わる先生も多いことから、視覚支援学校の相談支援センターや研究部と協力し、下記のような形で研修の支援に努めた。
- (1)宮城県立視覚支援学校のホームページ内に視覚障害教育専門部のコーナーを設け、研修の資料等を掲載、YouTube を活用して弱視特別支援学級の先生方の指導実践や支援に役立つような情報、講演会会の動画を限定公開リンクつきで発信した
 - (2)事前に質問等を集約し、オンライン会議システムを使用しての情報交換会を実施した。

令和3年度 宮城県特別支援教育研究会視覚障害教育専門部 第1回研修会 要項

1 目的

- ・ 県内の弱視学級担任や視覚支援教育に携わる教職員に対して、児童生徒の教育についての基本的な知識・技能を得るとともに教育内容・方法の理解を深め指導者としての資質の向上を図る。
- ・ 弱視学級担任同士の情報交換，ネットワーク作りの場とする。

2 日時 令和3年7月27日（火） 13時30分から15時30分まで

3 方法 オンライン（GoogleMeet を使用）
※参加者のアンケートの結果，全員が使用可能となっていたため。

4 対象 宮城県特別支援教育研究会視覚障害教育専門部（県内弱視学級担任）

5 内容 県内弱視学級担任同士の情報交換，テーマに沿っての検討会
※人数が少ないので，今回はグループ分けを行わずに行います。

6 日程

12:30～13:30 オンライン接続確認，待機時間
13:30～13:45 開会
13:45～15:15 研修：「弱視特別支援学級児童・生徒の指導と支援」
・ 自己紹介
お名前・学校名・担当学年・担任歴等
・ 情報交換
参加者から意見をいただくか，事前アンケートの内容について意見交換を行う。
オンライン研修の在り方についてよりよい方法を検討
15:15～15:30 閉会，諸連絡

7 第1回研修会参加名簿

No.	学校名	備考
1	宮城県立視覚支援学校	司会・進行・記録
2	七ヶ浜町立 ^{えきらく} 亦楽小学校	
3	塩竈市立玉川小学校	
4	大崎市立古川北小学校	
5	柴田町立船岡小学校	
6	利府町立利府第三小学校	
7	石巻市立 ^{かつま} 鹿妻小学校	
8	石巻市立稲井中学校	
9	仙台市立錦ヶ丘中学校	
10	名取市立閑上小中学校	
11	栗原市立若柳小学校	

アンケートのご意見から

事前にいただいたアンケートで「話題にしたい内容」に記載されていたものです。

今回は、情報交換の場なので、問題を解決するような指導法についてお伝えすることは難しいかも知れませんが、それぞれの工夫点や悩みについて共有できればと思います。よろしくお願いたします。

- ・ 交流学級での授業の受け方（座席・支援の仕方・補助器具の活用法）
- ・ 学習意欲を向上させる工夫
- ・ どんな自立活動を行っているのか？（同様の意見他にも2校）
- ・ 漢字の指導の仕方、指導例等
- ・ 普段の指導で気をつけていることは何か？
- ・ 児童が弱視以上で視覚支援学校が適当な場合、保護者にどのように転学を進めたら良いか？
- ・ 知的障害を併せ持つ弱視児童への学習における有効な手立てについて。
- ・ 全盲の児童に有効な教材・教具について教えていただきたいです。（聴覚教材も含む）
- ・ 漢字・英単語などの文字習得の学習における有効な支援の方法。
- ・ 見えにくさ（状況や対象）に応じた補助具・教具の使い方や種類。
- ・ 点字習得を中学校段階でどこまで進めるべきか。
- ・ 進路学習の進め方。指導方法。

当日の内容について

- ・ 先生方おひとりずつの発表を聞くことができ、具体的な実践例を知ることができました。
- ・ 先日の研修会では大変お世話になりました。事前にアンケート調査がありましたので、視覚障害を担当している先生方の抱えている課題を知ることができ、当日はそれぞれの先生方のお話を聞くことができ勉強になりました。児童の障害の実態や学年等が異なることにより、視力低下が進行したら、また単身している児童が成長したら、などと考えながら参加することができました。
- ・ 事前のアンケートをもとにしての話し合いは、それぞれの工夫点や課題について共有するために効果的であったと思われます。反面、時間の関係で全てについて話し合うことは難しいため、今後は、初めから話題を限定しても良いのではないのでしょうか。
- ・ 初めての顔合わせメンバーでのオンライン研修ということで、積極的に発言しづらかったですが、聞いていて参考になることもありました。アンケート内容すべてに答えることができていなかったことが気になりましたが、直接会って話す2時間の内容より少なくなることは仕方がないのかなと感じました。

当日の準備

- ・ わかりやすい連絡でした。
- ・ 事前アンケートとその結果が研修会の前に送付されたのが良かったです。
- ・ 良い
- ・ 準備や接続テストのために十分な時間を確保していただき、余裕をもって準備をすることができました。
- ・ 事前にアンケートをまとめてくださっていて、その内容に沿って話を進める形式を取れたので、スムーズに進めることができ良かったと思いました。

ネットワーク

- ・ ネットワークには明るくないので、同僚の先生にオンライン参加できるようにつないでいただき、初めてオンライン研修に参加することができました。
- ・ GoogleMeet は最適な人数で良かった。音声もよく聞こえました。
- ・ ネットワーク上の大きなトラブルもなく、アクセスできたので良かったと思います。
- ・ 受講前は接続が心配でしたが、問題なく参加できて良かったです。

その他

- ・ このような機会が今後もあればと思います。ありがとうございます。
- ・ 研修会場に移動しなくとも、勤務校にしながらオンラインで研修できて有効的に時間を使うことができました。ありがとうございました。
- ・ 他領域の先生型方もおり、勉強になりました。
- ・ 初めてのオンライン研修に参加することができ、大変有意義な時間を共有することができました。今後も弱視学級の先生方との情報交換やネットワーク作りを図っていきますよう、よろしく願いいたします。

令和3年度 宮城県特別支援教育研究会視覚障害教育専門部 第2回研修会 要項

1 目 的

- ・ 県内の弱視学級担任や視覚支援教育に携わる教職員に対して，児童生徒の教育についての基本的な知識・技能を得るとともに 教育内容・方法の理解を深め指導者としての資質の向上を図る。
- ・ 弱視学級担任同士の情報交換，ネットワーク作りの場とする。

2 日 時 令和3年10月14日（木） 午後3時30分から午後5時まで

3 方 法 オンライン研修（Google Meet を使用）

4 対 象 宮城県特別支援教育研究会視覚障害教育専門部（県内弱視学級担任）

5 内 容 事前にアンケートによる情報交換

6 日 程

15:15～15:30 接続確認，待機時間

15:30～13:45 開会

15:45～16:45 研修：「弱視特別支援学級児童・生徒の指導と支援について」

16:45～17:00 閉会，諸連絡

7 第2回研修会参加名簿

No.	学 校 名	備考
1	仙台市立小松島小学校	
2	仙台市立八木山小学校	
3	仙台市立南小泉小学校	
4	石巻市立鹿妻小学校	
5	南三陸町立伊里前小学校	
6	石巻市立飯野川小学校	
7	仙台市立宮城野小学校	
8	石巻市立釜小学校	
9	仙台市立北仙台中学校	
10	仙台市立五城中学校	
11	名取市閑上小中学校	
12	美里町立小牛田中学校	
13	宮城県立視覚支援学校	司会・記録・助言

事前にアンケートでいただいた話題に、本校の中澤がお答えしています。
 こちらの資料を研修で使いますので、持参して参加をお願いします。

学校名	話題内容
小松島小	ChromeBook について、操作上助けとなる方法・技術があれば教えてください。(音声読み上げも、ChromeBook はいまいちとネットで見ました。) また、学習で使い勝手の良いアプリ (国語・算数・・・その他いろいろ) もしあれば教えてください。
【事務局より】仙台市では ChromeBook が導入されているようですが、本校 (視覚支援学校) では、使用しておりません。仙台市の先生方で情報の共有をしていただければと思います。	
八木山小	UD ブラウザの PDF 版の教科書を使っている児童がいましたら、詳しい内容や使い勝手等を教えていただきたいです。(本校では e-pad を使用中ですが、PDF 版の申請を進めたいと思っています。)
<p>本校では、中学生になると拡大教科書と併用して UD ブラウザ電子教科書を使い始めますが全員ではありません。高校生でも拡大教科書のみを使用している生徒もいます。ただし、一般の高校に入学すると、義務教育ではなくなるので、拡大教科書はほとんどありません。あったとしても高校の拡大教科書は高価だし、注文し、教科書ボランティアさんが作成するのを待たなくてはなりません。そのため、弱視の高校生は、電子教科書を使います。高校で初めて電子教科書を使うと戸惑うでしょうから、中学校までに電子教科書の扱いに慣れておくといいですね。</p> <p>小学生高学年になったら、国語や社会科等、長文を速く正確に読まなくてはならなくなりますから、UD ブラウザ電子教科書の R (リフロー) 機能を使って、文章だけにして読む。図や表などが出てきたら、PDF に変えて見る。特に、国語は縦書きで、弱視の子どもには読みづらいですから、リフロー機能で横書きに変え、配色も白黒反転にするとか、子どもが読みやすい教科書にカスタマイズできれば効率良く、ストレスが少なく勉強できます。</p>	
八木山小	Chromebook を使用する機会が多くなっています。弱視の児童への便利な機能や使い方等ありましたら共有させていただきたいです。
【事務局より】仙台市では ChromeBook が導入されているようですが、本校 (視覚支援学校) では、使用しておりません。仙台市の先生方で情報の共有をしていただければと思います。	
南小泉小	中学校での学習の様子
<p>中学校によって様々です。弱学担任が全ての授業についている学校もあれば、弱学担任ではない教員がついている場合もあります。また、国数だけは教科担当の教員と個別学習を行い、他の授業は協力学級で一斉授業を受け、そこに弱学担任がついている等、生徒の実態と中学校の事情により各校どのような指導体制を取れるのかを検討していただいているようです。</p>	
南小泉小	登下校をどのようにしているのか (家族の付き添い、一人で白杖など)
<p>多くは、単独または友達や兄弟と通学しているようです。保護者や担任と通学練習をして、学校と家庭間で安全上問題なしと判断できれば許可しているようです。本校の歩行訓練士が依頼を受けて歩き方のアドバイスをすることもできます。</p> <p>弱視学級在籍の小学生で、白杖を使って登下校している児童もいます。ただし、白杖を持たせるときは、慎重に進めた方が良くと思います。白杖を持つことに抵抗を感じる人はたくさんいます。詳しくは、個別に御相談ください。</p>	

鹿妻小	教材教具の有効な活用方法について（音声教材も含め）
<p>弱視用と全盲用でもたくさんの教材教具があり、子ども一人一人の実態が違うため、個別に御相談しましょう。</p> <p>1つ情報として、本校のお隣にある宮城県視覚障害者情報センターでは図書の貸し出しをしています。点字の絵本や触る絵本や音声図書（子ども用）も若干あります。会員登録が必要ですが電話でできますし、わざわざ出向かなくても郵送してくれます。</p>	
伊里前小	自立活動の実践について具体的な取組例
<ul style="list-style-type: none"> ・視覚補助具の使い方（ルーペ、単眼鏡、拡大読書器、ipad、パソコン等） ・靴紐を結ぶ ・爪を切る ・おぼんの中の物をこぼさずに運ぶ（平行に持つ） ・お椀にこぼさずに味噌汁をよそう ・お茶を入れる ・一人で通学する（単独歩行） ・自分の町探検 等 	
伊里前小	視覚補助教材の活用について具体的な取組例
<p>ルーペや単眼鏡、iPad を使って校内の掲示を見る・・・案外、学校内の掲示や高い位置にある表示は見えていない可能性があります。もしかしたら、そこにそれがあるということ（存在）自体も分かっていない場合もあります。</p> <p>最近の傾向として、子どもたちは、タブレット端末はカッコイイから使いたい、でもルーペは嫌だ、という傾向があるようです。しかし、さっと取り出せてパッと見られるのはかさばるタブレットではなく、ルーペや単眼鏡なのです。ポケットや筆箱に入りますから。嫌でも、便利だと気付く時が来ると思いますので、使えるように練習だけはしておいてください。</p>	
飯野川小	タブレットの活用方法（どんなアプリを導入しているか等）
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年では、筆順アプリを皆さん使っているようです。 ・黒板を映して手元で見たり、全校集会の時に、壇上の校長先生を映したりする。 ・校外学習先の頭上の木の細部を拡大して見る。 ・本校の高校生は、道順アプリを使って、調べながら歩く練習をしています。 ・「信GO!」という日本信号株式会社のアプリをダウンロードして、音響信号機の音の出ない時間帯（早朝、夜間）に音声で知らせる方法を使って歩くこともしています。 ・大人になると全部一人でやらないといけないので、様々な音声アプリがあります。 	
宮城野小	キャリア教育について
<p>・『キャリア・パスポート』…小学校から高校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動やホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自分の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのこと。（令和元年12月 宮城県教育庁高校教育課）</p> <p>・志シート（宮城県版キャリア・パスポート）小4～6年用、中学校用 （令和2年2月 宮城県教育庁義務教育課指導班）</p> <p>→これを受けて、視覚支援学校独自のカスタマイズした『キャリア・パスポート』を作成しました。本校のキーボードは、『人・地域とのかかわり』、『自分らしさ』、『自己肯定感の向上』です。</p>	

宮城野小	自己理解から援助要請までの支援の在り方について
<p>簡単ではない内容ですよね。『自分の見え方』を人に分かるように説明できることと『どのような場面で、どのように困り、どのように支援してほしい』のかを整理してみると良いと思います。これから中学校進学となると、想定される場面を先生が「こういう場面もあるかもよ」と伝えてあげることも必要かもしれません。</p>	
釜小	<p>運動に対する取組が少ない児童に対して、積極的に体を動かすようにさせるにはどうしたらよいか教えていただきたいです。</p>
<p>毎日、体育館を走るとかはいかがでしょうか。先生と肩を並べて、または、リング(パラリンピックの視覚障害者と伴走者の間にある物は『きずな』と呼びますが)で繋がって。 また、視覚障害者スポーツ(卓球、ソフトボール、バレーボール、サッカー等、様々)を協力学級のみみんなでやってみてもいいですね。</p>	
釜小	<p>他の人と仲良くなるために使うコミュニケーションツールを教えていただきたいです。</p>
<p>これは、視覚障害児に特化した物ということでしょうか。ツールという扱いはありませんが、自分の見えにくさを友達や周囲の人たちに理解してもらうことは必要です。例えば、「私は、目が見えにくいので近くにいっても誰だか分からないことが多いです。声をかけてもらったり、名前を名乗ってもらったりすると嬉しいです。それから、近くにいってもみんなが笑っているのか怒っているのか泣いているのかが分からなかったりします。もし、その場に合わないことを言ったりしたらごめんなさい。」とかはいかがでしょうか。</p>	
北仙台中	<p>授業における適切な援助の仕方</p>
<p>生徒の実態によると思いますが、先天性眼疾患の中学生であれば、どのように援助してほしいのか自分の学習スタイルが出来あがる時期だと思います。生徒に聞いてみてはいかがでしょうか。必要以上に支援していたり、教師が気付かない点で手伝ってほしいと思っていたりするかもしれません。 また、高校進学に向けて、いつまでも小学校と同じ支援方法というのも違うかもしれません。高校には、弱視学級はありませんし、視覚障害生徒への合理的配慮という点での配慮はしてもらえますと思いますが、何をどのように支援、配慮してほしいのかを自分から声を上げないといけません。そういうことができる力を付けてあげてほしいと思います。</p>	
北仙台中	<p>機器の効果的な使い方について</p>
<p>眼疾患の特性によって、使える補助具も違いますが、小さいころから使っている補助具だけでなく、新たに色々な種類の補助具が出てきたり、拡大読書器やルーペであってもブラッシュアップされて高性能な物がどんどん出てきたりしているので、取り入れてほしいと思います。</p>	
北仙台中	<p>校外の活動での適切な援助の仕方について</p>
<p>学校の中や通学路は毎日動いている範囲なので、つまずいて転倒することはないと思いますが、校外の初めて(しばらくぶりに)行く場所については、その場の説明(歩行用語でファミリアリゼーションと言います)をする必要があります。校外学習の下見に行ったときに写真を撮ってきて、事前に生徒に見せることも効果的です。そして、見せるだけではなく、言葉でも説明を加えます。そして、校外学習当日も、現地に着いたら段差や階段、でっぱり等の危険個所だけでなく、トイレの位置や集合同所等、必要か所を一緒に行って確認すると良いでしょう。そうすれば、常に側に付いていなくとも友達との活動で大丈夫だと思います。</p>	

五条中	通常学級で生活する生徒の事例について
<p>私の知っている限りでは、小学校から中学校、高校と一度も弱視学級に在籍したことがない方と、小学校では弱視学級在籍だったけれど、中学校から通常学級になった方がいます。幼児性弱視で、小学校は弱視学級にいたけれど、ほとんど支援が必要なく、本人の意思で中学校からは通常学級在籍となっています。どちらの方々も、本校の相談支援センターが小中学校を訪問し、学校生活における支援方法等はサポートさせていただきました。具体的には、座席位置やルーペ、単眼鏡、書見台等の使用方法です。それを、生徒本人が理解して自分から見えにくさを補う方法や周囲に助けを求める力を付けていきます。</p>	
閑上小中	<p>〈紙の拡大教科書とUDブラウザ（PDF 拡大教科書）について〉</p> <p>ロービジョン外来の先生から、「UDブラウザをなるべく使うように」との指摘があり、保護者も外来の先生と同じ意見を持っている。現在はUDブラウザで全教科書使用可能だが、本人は紙の方が使いやすい、UDブラウザはページ検索がすぐできるといった両方のメリットを感じているようである。ICT化が進む中、視覚支援学校や他の学校ではどのようにUDブラウザブラウザを使っているかお聞きしたい。</p>
<p>一人一人、置かれている環境や特性が違うので、全員が当てはまるわけではありません。小学生までは、拡大教科書(紙媒体)を使い、中学校以上は電子教科書(UDブラウザ)も併用している人が多いようです。貴校の生徒さんが両方のメリットを感じているのであれば、併用で良いと思います。高校生でも、本校の生徒は拡大教科書(紙媒体)も電子教科書も使っています。iPadは、地図やグラフ等、面積の広い全体像を見る時は不向きなので。</p> <p>ただし、拡大教科書のデメリットは、かさばることです。そこをクリアできるのであれば、生徒さんの学びやすさを尊重してあげることが良いかと思います。</p>	
小牛田中	自立活動の時間について（どのような指導を行っているのかお伺いしたいです。）
<p>伊里前小学校の櫻井先生からも、同様の相談をいただいておりますが、中学生であれば、視覚補助具を外部で使用する機会を作ると良いと思います。</p> <p>また、高校への通学を考えて、スマホに交通系のアプリ（電車やバスの時刻検索等）をダウンロードして、自分で乗る乗り物の時刻を調べて移動するとかはいかがでしょうか。</p>	

当日不参加分

白石第1小	点字が読めるように指導をする際、どのように工夫しているのか学びたいです。
<p>点字の導入に関しては、児童に負担をかけ過ぎないように指導してほしいと思います。時間をかけて丁寧に、遊びを通して楽しい雰囲気の中で指導しましょう。盲児と弱視児では使用する教材も違ってきます。</p> <p>それから、点字指導の導入時は、『書き』よりも『読み』を重視します。その理由は、『読み』の方が、『書き』の指導よりも時間を要するからです。『読み速度を上げる』ためには、この初期段階の指導が重要です。</p>	
稲井中	視覚支援学校高等部進学を前提とする生徒のカリキュラム編成について
<p>本校高等部普通科には、A課程とB課程があり、A課程は準ずる教育、B課程は個の教育的ニーズに応じた指導を行う課程です。どちらの課程への進学をお考えなのかによっても中学校での指導カリキュラムが変わってくるかと思えます。</p> <p>コロナ禍ではありますが、是非、本校高等部の授業見学をしていただき、本人や保護者と早めに進路の方向性を相談することをお勧めします。</p>	
亘理中	弱視生徒に対する試験時間1.3倍の妥当性
<p>センター試験（共通テスト）で、『弱視の試験時間1.5倍』が認められている例は多数あります。ご存じの通り、弱視の幅は広いので、盲に近い弱視生徒であれば、1.3倍では足りません。大切なのは、定期考査等、常のテストをどう受けているかです。</p>	
亘理中	点字導入前の生徒に対する口述試験の可否
<p>中途で見えなくなった場合、または見え方に変化が生じた場合、墨字テストが難しければ口述試験はやむを得ないと思います。実際、そういう事例もあります。ただ、その試験内容が、他の生徒と同じ内容なのか、別問題なのか、テストで測りたかった学力を口述方式で測れたのかどうかは評定に関係してくると思います。</p> <p>本人に、口述試験をやる気があるのか、それとも点字を習得するまでは見込み点を付けるのか、学校内での相談も必要ですね。</p>	

令和3年度 実践集録

令和4年3月 発行

**発行者：宮城県特別支援教育研究会 視覚障害教育専門部 事務局
宮城県立視覚支援学校**

〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉六丁目5-1

TEL:022-234-6333 FAX:022-234-7974